

[資料紹介]

個人蔵本「住吉物語絵巻」詞書翻刻

要旨

「住吉物語」は、異本が多く、写本のほか、絵巻、奈良絵本、版本など多数伝存する。本稿では、個人蔵の絵巻上中下三巻の翻刻、影印を掲載する。略本系に属するが、詳細な内容、美術史的評価については、本冊・田中亜紀論文を参照されたい。

キーワード：住吉物語 略本系 絵巻 江戸時代

異本の多い「住吉物語」の中でも歌数の少ない略本系に属する。冒頭が「中比(ころ)三てうのあせちの中納言と申人」で始まる伝本は、①京都国立博物館本(絵巻三巻)⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾、②九曜文庫蔵本大型奈良絵本⁽⁴⁾、③国立国会図書館蔵吉野弘隆旧蔵本などが知られている⁽⁵⁾。

個人蔵本を実見した西下経一は、京都国立博物館蔵「住吉物語絵巻」(江戸時代卷子三巻)に最も近いが「直接父子の関係にあるとは思はれません。従兄弟の関係か、さもなくば伯父甥のやうな関係であらうと

思はれます」と指摘している⁽⁶⁾。

【凡例】

- ・翻刻にあたっては、改行は原文通りとした。
- ・句読点は補わない。
- ・散らし書きについては適宜字下げ、字あけを行った。
- ・挿図は翻刻の中に「第一段絵」のように示した。
- ・挿図が欠けていると思われる部分は(絵欠か)とした。

註

- (1) 西下経一「住吉物語の形態に関する研究」〔岩波講座・日本文学〕、一九三二) によれば略本系の甲本第一種a。
- (2) 桑原博史「中世物語研究―住吉物語論考―」(二栄社、一九六七年)によれば略本系の第一類。
- (3) 横山重「住吉物語集(本文篇)」(大岡山書店、一九四三) 投稿時(二〇二二年九月十五日現在) 京都国立博物館所蔵品データベースには上巻のみが公開されている。

原* 口 志津子

(4) 中野幸一『奈良絵本集2』(早稲田大学出版部、一九八七年)に影印掲載。

(5) 註2前掲書に翻刻がある。同書によれば、そのほか、④天理図書館蔵本 奈良絵本、⑤大阪府立図書館蔵奈良絵本があることが指摘されている。

(6) 所蔵家に残された昭和七、八年頃の手紙による。日付は二月二十一日で、岡山市門田より現所蔵者の曾祖父宛てたものである。

〔謝辞〕

調査にあたっては、ご所蔵者に多大なる御高配を賜った。また、調査、翻刻に際しては、本学名誉教授・塩出貴美子氏の御指導を賜った。記して御礼申し上げる。

上巻(第一段)

【第1紙】

中比三てうにあせちの中納言と申人お

はしけり北のかた二人もちたまひつ、か

よひたまふひとりとはときめくかんたちめの

御むすめ此はらに姫君二人おはしけり

いまひとりのうへはふるき宮はらの御むす

めかたちなへてならずおはしけるいかなる

たよりにか此中納言忍ひてかよひたまふほ

とにやかて人めもつ、ますなりて住わた

り給けるにひかるほどの姫君いてき給ひ

けりたくひなくおほしめしかしつき

給ふ事かきりなしとし月かさなりて

おとなしくならせたまふに母宮例な

らすわつらひ給ひ日にそへておもくの

みなり給ふされは中納言にのたまふ

やうこの世はさためなきならひなれば

かくてはかなくなりなはおさなひ人の

ためこそいと哀に侍れ我なくともみ

なく中ことさせたまふないかにもおふし

てみかとにたてまつりたまへし姫

【第2紙】

君たちにおほえおとらすとなく

のたまへは中納言われも親なればなとや

おとりておもひ侍らんなどのたまひて

あかしくらし給ふほとにしたひによはらせ

たまひつ、なさけなく野への露ときえ

たまふ中納言はおなし道にもならはや

とかなしひたまひのちのいとなきさる

へきさまにして四十九日もすきしかは

おもふにかひなくもとの北のかたへわたり

たまひけるかの宮の御めのとにさゑもんの

すけといふ女房侍りしかのちの御事

はて、よりさまをかへてすみよしの

かたへまとひ行けり姫君はおさなき御

こ、ろに母宮の御事のみこひかなしひ

たまふに中納言はほかへわたり給ひけ

れはいと、つれくつきりなし庭のこ

はきまでも露おもけなるをいと哀に

めのと、なかつ、過したまふ中納言

つねにわたり給ひ見たてまつりてかへり

給へはなをしの御袖をひかへてしたひ

給へは心くるしうおほしなからかへり

給ふ二人の姫君たちと一所にすませ

まほしくおほしめせとも今もむかしも

【第3紙】

まことならぬ中なればとてめのと、す

ませたまひけり月日かさなるま、に

ひかりさしそふこ、ちして見えさせた

まへはめのと御くしをかきなて御母うへ

に見せたてまつりなはいかにとてな

くよりほかの事はなし

【第4紙】第一段 絵

〈第二段〉

【第5紙】

とし月をふるまゝに姫君物を思ひ
しりたまふほとにめのと申納言に申
けるやうは此一とせ二とせとならせ給
ひてしつ心なく侍れはは、宮のおほ
せられしことく宮つかへの御事はいかに
と申ければ申納言その心侍るにやと
うれしくおほして我もわする、ひま
はなけれども打まきる、ことのみありて
過しぬむかへとりてつねに見奉らんと
て四月十日ころとさためたまひてその日
にも成しかはむかへ奉りてふたりの姫
君たちと打かたらひておはするを申
納言御覽していとうれしくおほしけれ
中の君三の君もめやすき様なれとも
此姫君はことにすぐれさせ給ひてひかる
ほとにそおほしける姫君の御めとの
子にし、うと申むすめありけるか年は
姫君に二はかりまさりけるか心さまよ
りはしめてかたちありさまあいきやう
こほる、はかりにてもものなとおかしう
いひてあらまほしきさま也これ姫
君につきそひ奉りかたときもたちさ
りぬればひめきみ物うき事にそお

【第6紙】

ほしける申納言にしのたいをしつらひ
てすませ奉らんといとなみたまひけるほと
にま、は、心のうちにはいか、とおもひけれ
とも人き、にはまことに宮にをくれ
たまひてのちはやかてむかへ奉らま
ほしくおもひ侍れとも打まきる、事
のみありていま、てすきつるなり姫
君たちとつれ／＼なくさみておほし
ませいかにもかし恋しとおほしつらんと
あはれけにいひければめのと、あやしき
所に日ころはうちうつもれておほせし
にかくて見たてまつれば今ははる、
心ちしてめやすきなんといひて打なき
ける申君はむかひはらなれはいつしか
兵衛のすけなる人にあはせたまふ姫君
はにしのたいにすみ給ひて中の君三の
君とむつましくあそび給ふかくて月
日をふるほとに宮つかひの事申納言に
めのと申ければ我も心にわする、隙は
なければとも北のかたにいひあはせんも
なさぬ中の事なれはいふかひなく物
うくて月日をかさねけるとのたまふ其
ころせうしやうとて時めき給ふ人かたち

【第7紙】

さいかく人にすくれ世にきこえたる色この

みにておほしけるにおほいとこの御はし
たものにちくせんといふものありけるか
この姫きみのは、宮の御もとに家つか
さにてとのものたいふといひけるもの、
めにてありしか此ひめ君をはつねに
見たてまつりければちくせん少将のもと
へ行てあれは人のかたちのよしあし
を物かたり有つてにちくせん申やう
申納言殿のひめきみ宮はらをふた
はのほとより見たてまつりしかたくひ
なくおほせしか母みやうせたまひて後
とかく打まきれてまいりよらされ
はいか、おはすらんなどかたりければ
此よし少将き、たまひてちくせんをよ
ひよせてのたまふやう我こ、ろにかなふ
人なくて物をのみおもひ過るに申納言
のみやはらの姫君ををよく見しかと
たつねたまへはちくせん申やうみつから
かおつとにて侍るもの、ゆかりにて
よく見奉りて候世に有かたくなんい
よ／＼うつくしくおひたらせおはします
とこそうけたまはれ申納言殿は、宮
【第8紙】
のいひをかされたまひし事なればみかと

にたてまつらんとたまふをまゝは、の
うちあはてとかくすきおほしなげくと
なんかたりければせうしやうその人の
事いひよりてふみなとつたへてんやと
のたまへはちくせん申やうとかくの事は
しりはへらねともまつ文をたまはり
なんと申せはせうしやうよろこひたま
ひてころは神無月はしめつかたの
事なれはもみちかさねのうすやうにかく
なん

はつしくれけふふりそむる
もみち葉に色のふかさを

おもひしれ君

とかきてひきむすひてたひければ

【第9紙】第二段 絵

〈第三段〉

【第10紙】

その日の暮ほとに中納言殿のにしのたい
にまいらたれは人々めつらしく見あけし
中にし、うさし出つ、うちなきてあ
なゆ、しいかにおもひつ、まいる給へる
そやそのむかしの事おもひ出られて
あはれにむつまじうこそ侍れ姫君も
おとなしくおはしますにつけてもほと

なくむかしになる事のかなしきよとて
うちなきければちくせんまことに哀と
おもひてともになきてその、ちはしけ
き事のみ侍りて打すきまいる候はず
我なからもいとつらくなん過にしかたの
恋しくて人々をも見たてまつらんと
おもひてまいたりたりと聞えければ姫君
はことならしつ、は、宮の御事おほし
いて、しのひねにこそなきたまひけれ
さてちくせんいてさまにし、うをよひ
いて、四位の少将殿よりの文なりかやう
の事申にく、はんへれともやんことなき
人のいたくおほせらる、事のかたしけ
なくてと申ければし、ううけとり姫
君にしかくの御文なりと申て御かたはら
におきければかほ打あかめてとかくの事

【第11紙】

をものたまはずことほりとそおほえ

ける

(絵 欠か)

【第12紙】

ちくせんかへりて少将のもとへ参りて
ありつるやうをこま／＼ときこえければ此事
かなはずは世にありはつへき心ちせずと
てうちなかめつ、なみたくみ給ふへはちく

せんいよ、あはれとおもひてその後
は日ことにかよひて御かへり事はいかにや
とほめかしかれとも一くたりの御返事
もなく聞えわつらひてありし所に
まゝは、此事き、てちくせんをよひと
りて姫君のもとへ文つかはし給ひけ
るはたれなるらんとたつねければはし
めはとかくつら見れともいみしくとひけ
れはありのまゝにそかたりけるまゝは、
いやさやうの人はたよりある人にこそい
たはられんとおほさめ母もなき人よりも
いかてかざるへき様にたばかりて三の君
にとりかへたまへかしといひければさす
かにいなひかたたくてたいの御かたより
は御返事もさらになければ少将には
つきせすせめられけるもいとつらく申
かなへん事もかたければともかくもおほ
せをはそむかしと申ければよろこひて
うちき一かさねこれは三の君のこゝろさ

【第13紙】

しとてとらせけりせうしやう殿にはさら
はもとの御心さしの人なりとしらせた
てまつらんと申ければまゝは、申やう
よくのたまひたりそのよしこそとてよろ
こひけるちくせんはかへりてせいしやうの

御もとへまいりてかの御かたへなをも御文
たまはりて聞え侍らんといひければう
れしくおほしめして又かくなん

よと、もにけふりたえせぬふしのねの

したのおもひやわか身なるらん

とかきてちくせんにたひければま、は、
のもとへもちて参り少将の文とてわたし
ければ打ゑみてひらき見てうつくしく
もかき給へるものかなとくく御返事
まいらせたまへ今やうはよしはまぬ事
そと聞ければ三の宮うちそはみつ、
かき給へるすかためやすき様也

ふしのねのけふりときはたのまれす

うはの空にやたちのほるらん

とかきて引むすひてたひければ少将殿
にもちてまいり御返事なりとてたま
つればよろこひ給ていそきあけて見
たまへは筆のあとつくしければうれしと

【第14紙】

おほしつ、ことかよはずほとに人々き、て
おかしとのみ思へりその、ちほとなくあはせ
聞えければ少将はたはかりたるはしらす
してかよひ給ひておさなきさまもことはり
と思ひつ、ひかるほとこそなけれどもよろつ
なへての人にはひとしからず見えたまひ

ければかひあるこ、ちしてうちかよひ
給へり

【第15紙】 第三段 絵

〈第四段〉

【第16紙】

秋の夜のなかきねさめにいきの葉そよく
風のをとむしのごゑくあはれなるおり
ふしつまをとやさしきことね聞えけ
れはあなゆかしこはいかにとおほして
まくらをそはたてき、給へはにしのたい
とき、なし日ころもよし有人のすむと
見えつるをたれなるらんと心をしつめて

おもふにはしめより我がたらひし人こそ
ことをひき給ふとき、しそとあやしく
て三の君にこれき、給へとありしかは哀と

き、侍るとのたまへはこれはたれのひかせた

まふそとのたまへはあね君のひかせたまふ

と聞えければひやうゑのすけの御かたかと

とひたまふいやこれは宮はらの姫君とあり

しかはいとあさましくもたはかられぬと

くちおしくきこそにしのたいにおかしく

おほすらんちくせんこそほいなけれどもおほ

してあけもやらぬにせき出給ひつ、

やかてちくせんをめしてしかくとうらみ

給へはいひやるへきかたなくてかほうち
あかめて有つるをいまはおもふにかひなし

しらぬかほにてすくさんとかへすくうらみ

給へはいふへきやうなくしてたちける

【第17紙】

少将も三の君哀とはおほしなからはし
めよりおもひそめてし事にあらずさし
もきこえざりし人たにもこれほとなるに
ましていかならんとおもひて冬にも成ぬれ
はなにともしてし、うにあひて心のう
ちをもしらせはやとおほして文をかき
て雪のいみしくふりしにしとみのもとに

立よりき、給へはおかしきよものこそゑかな
いつれを梅とわきかたしなといひける中
にすこししのひたる声にてかひのしらね

をおもひこそやれと口すさひ給ふをこれ

そたいの君なるらんとむね打さはきつ、し

のひかねつ、しとみをた、きたまへはし

しうたれなるらんとたちいて、見ければ

せうしやうたち給ひけるし、うゆきかくれん

とするを袖をひかへてふみをとらせたま

はんもさすか又人めのつ、ましさにやか

てかへりたまひぬ

しらゆきの

きえなん

よにふるかひには

こそぞ

なければとも

おもひ

かな

し

き

(絵欠か)

【第18紙】

あらたまのとしたちかへる正月の中の
十日あまりの事なりしにいまやさか野の
春のけしきおかしがるらんしひのひて
見んと中君いさなひ給へはをのくま
ことにとてゑたちたまひける車三両
あしろの車には姫君たち三人のり給ひ
けるいま二両には女房たちはしたも
そのほかしたくのりにける此よし少将ほ
のき、たまひさか野のほとりへさきへゆ
きて大きな松のしたにかくれゐて見
給へは女房たちとはしたものはかり車
よりおりて小松引あそひいとおかしき
けしき御らんしさせ給へかしつ、ましくも
侍らすと女房たち聞え侍ればまつ中の君
おきたまふこうはいのうへにこきあやのうちき
をきたたまへりあてやかに見ゆ三のきみは花
山ふきのうへにもえきのうちきをそきた
まへり打あゆみたまひし有さま今すこし
あいきやうつきたる様也姫君はと見にも
おり給はずはんへはし、うさしよりて

人をはおろしたまひていかにと申ければ

そのときおりたまふなごぬ中の哀さは

時ならぬふちかさねのうへにもえきのうち

【第19紙】

きをきたまひてあふきをさしかさしつ、
あゆみたまひし御すかたうつくしなと、申
は中くをろか也かみはうちきのすそをは
くさまなり人のありともしらすあそひ給ふ
をよくく見給ひて少将は明くれたまひ
大きな松のしたにゐたまふを姫君し
も見つけ給ひてあふきさしかさしいそき
車にのりたまふ少将はたち忍ひたるかひあり
て御すかたを見つる事のうれしさよとて
かくゑいしをくりたまふ
春かすみたちへたつれと野へにいて、
松のみとりをけふ見つるかな
ひめ君へとはおほしなからさすかに二所
の御中へと聞えければ中の君は姫君へ
と仰ければ姫君は中のきみへといひか
はし給ふほとに中の君
かたをかのみつともしらす春の野に
たちいてにけん事そくやしき
となかめたまひて姫君をいかにくんと
のたまへは
手にもふれてけふはよそにそかへりなん

人見のをかの松のつらさよ

とあれはせう将いよく忍ひかたくて

【第20紙】

車のもとに立よりいまは何をかかくれ

させたまふそやそのかひも侍らすとおほ

せければ

(絵欠か)

【第21紙】

中の君こはいかにとて車よりはせう
将殿のうへはかりこそおりさせ給ひけれ
よの人をはいつしりかほにと聞えければ
少将うちわらひてあなゆかしの御もの
あらそひやとてたひくうたよみなとし
給ひて日もくれければをのくかへり給ひ
ぬ正月つこもりの比姫君の御めとはかな
くなりければ姫君なげきかなし給ふ
事かきりなしし、うはざとにかへりゐて
いかに姫君の御つれく心に心ほそくおほす
らんとおもひやりてそくしける姫君は
めのとかなきにつけてもし、うさへさと
こもりぬるをましかねたまひけるやう
く日も過ゆくま、に四十九日に成し
かはし、うにうちき一かさねつかはすとて
から衣しての山路をたつねつ、

われはこくみし袖をとばなん
とつまにかきてつかはしければし、う是
をかほにあて、なきかなしひけるさて
七月のころ参りければよるこひのたまふ
事かきりなしはつ秋のけしき月の

いろさへ物哀なるにいとほかなき事とも
いひあはせてなきるたりしに少将立き、て

【第22紙】

し、うをよひいたしとふらひはんへりてこ
ま／＼とかたり給ふところにし、う物思ふ
ほとかなしき事はあらしと聞えければ少将
さこそはおもひしり給ふらめとそいひかは
し給ひけるかくてはや夜もふけかねの
をとも聞えけると申せはこれを入あひ
とおもはましかはとのたまふ姫君は
おかしとそき、給ひけるその、ちたひ／＼
姫君へ文つかはし給ひけれとも一くたり
の御返事もなかりければ少将は月日かさ
ぬるま、にいよ／＼おもひまさりて例のにし
のたいに立やすらひて君かあたり今そ
すきゆく出て見よこひする人のなれる
すかたをとこゑうつくしくうたひてとを
り給ふを侍従き、てつま戸を、しあ
けいかにと申ければふかき山のおくにも入
なんと聞えければし、うあらたつとやかなら

すみちひき給へと申ければいてやおなし
木陰にやとりひとつなかれをむすふたに
も浅からぬえんとこそきくなるにまし
てむさしの、草のゆかりなれはおなし
はちすのえんとなり侍らんとたまへは
し、うまことにうれしくもものたまふ物かな

【第23紙】

よきせんちしきかなとわらひければ今は
さやうにわらひたまふともあはれとおほし
あはする事もありなんといいひてはかな
くはや九月にもなりにけり
(絵 欠か)

中巻(第一段)

【第1紙】

中納言北のかたにのたまふやうゆく末は
しらすふたりのむすめはありつきぬ此たい
のかたをうちへまいらせはやとおもふに
うちはあはぬ事のみありてとのたまひつ、
なき給へはま、は、我子ともにましたる
をねたしと思ひて中／＼におほえすくなき
宮つかへよりも時めくかんたちめなどにあは
せ給へかして聞えければ中々なみ／＼ならん
人に見せん事心くるしとのたまへはともかく
もよきにはからひ給へといひなからいかにもし

てあやしき名をたて、中納言うとません
と思ひけるほどによるひるたくみけるさて
中納言は姫君のうちまいりしも月の事なれ
は人しれすそのいてたちをのみいそきた
まひけるま、母もともにいとなみあつかふよし
にてしたにはなにとそしてうとません

【第2紙】

とおもひてしつかなるおり中納言にま、母
聞ゆるやう此たいのかたをわ我むすめたち
にもをとらすたれにもすくれおはしませかし

【第3紙】

とおもひしに此はつ秋よりの事を露しら
さりし事よとてそらなきしていひけれ
は中納言こは何事にて侍るそふしきなる
事をあきれてとひ給へはよる／＼六角堂
のへつたうとかやあさましき僧の姫君のも
とへかよひけるそのころはたいのかうしをは
なちて人の見るをもしらすして出ける事
の心うさよこれをいつはりとおほしめしき
ふらは、につほんこくの神ほとけにもくし
と御覽せよなき事をは申さすとこきえ
ける

【第3紙】 第一段 絵

〈第二段〉

【第4紙】

よもさる事あらし女房たちのかたへ
そかよひつらんとたまへはま、は、うはの空
なる事をは申さぬそよく／＼き、て

申なりといひけれとも中納言は猶もまことに
おほさすま、は、三の君のめのとにきは
めてむくつげなる女にいひあはせけるやうは

たいの姫君を我むすめに思ひまし給ふ事

のねたくてとかくさらへけれともかなはぬ
をはいか、せんといひけれはむくつげ

女われも此事やすからすおもひ侍るに

うれしくものたまふものかなとてさ、めき
あはせて二三日すきてあやしきそうを

かたらひたいの御かたに入をきて中納言に

いまふしの出るを見給へといへは浅ましく
おほしておさなくて母にくれめのとさへ

はかなく成しかはくわほうすくなきものか
なあさまし／＼とてたちたまひける是

より内まいりの事おほしと、まりぬた
いの御かたにおはして見たまへは姫君は

なに心なくおはせしにし、うにむかひて
ゆ、しき事の有ける侍従はよきものと

おもひしにと有しかは姫君もし、うもふ
しきにおもへり中納言はたちさまに侍従

【第5紙】

にのたまひけるはうき事をきけはうち

まいりはと、まりぬとてかへりたまへとも心
えぬ事なれはいひのふるかたもなかりけ
る

【第6紙】第二段 絵

〈第三段〉

【第7紙】

しきふといふ女房たいの御かたにこ、ろよせ
なりけるをよひとりて中納言殿しかく
の事をおほせられしは何事とかき、給ふ

そとたつね給へはされはこの事をとくま
いりて申さんと思ひつるをひまなき事

のみしけく侍りて打過ぬきたのかたしか
くの事をたはかり給ふといへはし、うむね

打さはきて姫君にかくと申ければ母なき
ものは世にもあるまじき物にこそとて引

かつきてふしたまふま、は、はよろこひてむく
つけ女とゑみあへり中納言は内まいりこそ

やみぬともさもあらん人に見せはやと
おほしける所にうせ給し内大臣の御子

に宰相の中將とて廿四五になり給ふ
か心かたちなへてならざる人なりしか此姫

君の事をほめかしける所に中納言いと
よき事そとおほして霜月とさため給

てま、は、おそろしき心とはしり給はて此事

ま、は、にいひあはせたまへはそれよき事
にとて心のうちには是もねたしく思ひて

なにとかさまたけはやとそ思ひける中納言
はたいのうへにおはしてし、うにあひ給ひて

内参りをと、まりし事のくちおしきながら

【第8紙】

さて有へきにあらねは此霜月に中將にとお
もふそのよし心えておはすへしとてこ

は、宮の御里三てうほり川なる所をしつ
らひてすませ侍らんといとなみ給ひけり姫

君はち、のおほすらん事のはつかしさにた、
あまになりてきこえさらん所へゆかはやと

思ふ也とのたまへはし、うそれも御ことはり
にてはさふらへとも中納言殿かくまておほし

たちぬる事をそむき給はん事もかいなかる
へしま、は、のたはかり給ふ事も後には

きこしめしなをす事も有なんと申なくさ
めけりま、は、此事を又ふかくそねみて

むくつけ女とさ、めきあひて此たいのきみを
あやしきものにぬすませはやといひけれは

むくつけ女打ゑみてそれこそいとやすき
事にて侍れわらはかあに、かすへのかみとて

七十はかりなるおきなめうちた、れたるか年
月のつまにはなれて人をほしかりと聞

侍りて候此よし申てぬすませ奉らんと

いひければまゝは、かひある心ちしてさらはとくとくのへよといそぎければむくつけ女かすへかもとへ行てしかくの事かたりければにくけなるかほにてうちゑみて

【第9紙】

うれしき事かなさりながら中納言殿いか、のたまはんやといひければ北の御かたよくはからひ給はんとの事也とてさゝめきはするをおりふし又かの心よせのしきふ物こしにき、ていとおしくおもひ奉りいそぎししうにあひてしかくの事を又たはかり給ふなりいか、侍らんと涙をなかけて申しければ姫君き、給ひて浅ましき事かなさきのためあまにもなるならば二たひかゝるうき事をきかまし物をそゝろにと、めをきてうき事をき、かさぬるよとて恨たまへはし、うも御ことはりそとてねをのみそなきけるかなみたと、めて申やうさのみかくのみにておはすへきにさふらはす中納言殿にのたまへかといひければさもあらなはいととうき事のみをかさぬらんとひ此たひとかく過とも又さまくの事をたはかりたまはめいかにもして聞えさらん山のおくに尼になりて此世をはなれんとのみなけきかなしひたまふ

(絵欠か)

【第10紙】

こみやの御めのとさゑもんのすけといひし人あまに成て住よしとかやいふ所にありといひしを思ひ出てし、う文をかきてそつかはしけるその文に久しくなとはをろか也姫君はめてたくおひ出させ給ふし、うか母なりし人もはかなく成てたれくもしる人なくていと心ほそくなんざこそ世をそむき給ふともうらめしくもかきたへ給ふものかな人つてならて聞えあはずへき事あり夜を日になしてのほり給へあなかしことかきてつかはしければあま君あけて見てわかき御心にさるものありとおほし出てかくおほせられしもうれしさよおしからぬ命ながらへて又見奉らんにや哀に夏かしくて涙にむせひけりさて御返事にはおほせのまゝ、いそぎまいるへしくはしくはみつかからとかきたりければ姫君これを御覧して聊はる、心ちそしたまひけるかくて人しれす出たらん事し、うといひあはするに中納言わたり給ひて見給へはさらぬやうにておはすれとも涙うきつ、見え給へは中納言は三

てうへおはしんまさん事もちかく成たる

【第11紙】

に此ほとは何とやらんおとろへさせて見え給ふとて色々のくたものををくり給へは姫君これを見給ふにつけても此ほと人のさんにてゆゑ、しき事をき、給ひながらも猶おほし捨ぬおやをふりすて、出るはさこそあとにてなけき給はん事つみのふかさよとおほして又なきたまふ中君三の君もたいにおはして何とてなけき給ふそと聞えければ世中そゝろに心ほそく侍れば御かたくを見まいらせてもほとふる事もやとのたまへはあないまくし何ゆへさる事の侍らんとて中君はことに物の哀をしりたる人にて侍ればなみたをうかへたまひてかくなんちきりてそおなし草葉にやとりけるともなきえなん夜半のしら露となかめ給ひて君たちもなくくかへり給ひける扱暮かたにすみよしの尼君のほり給ひけんさんありておそろしき事ともかたりたまひて車を参らせ給へよくしのひてといひつ、色々の物をとりした、めて尼君にさきへやりさしきなとうつくしくはきさはやけさせ給ふ御心

【第12紙】

のうちさこそはかなしかりけんおりしも
 中納言殿おはしたれは今はかりこそ見
 奉るへけれとおほして涙のもり出るをさら
 ぬていにまきはしておほせしを中納
 言殿見給ひて故宮の事をおほしいつ
 るにやさしいやうの中將を心つきなくお
 ほすにやとにもかくにもおほさんま、に有へ
 きにあはれおやおもふほと子は思はぬな
 らひこそかなしけれ神ほとけとおおやとも
 おもひ給へ我いのちを捨よとのたまふ事
 なりともいなふへからすあらし風にもあてし
 と思ふにとのたまへはいよ／＼かなしさまさり
 て母宮とめのとの事おもひいて、あさましき
 中に又見奉らてほとふる事もやと思ひ
 まいらせてとことほ聞えさるほとにてな
 き給へは中納言も打なき給ひて三てうに
 おはすとも我いのちあらんほとはつねに
 まいりて見奉るへけれはなしかはその
 事をおもひ出たまふいたくななき給ひ
 そとてかへり給ひぬ夜ふくるま、にすみ
 よしのあま君より車きたりぬくしの
 はこともはかりとらしくしたまひてし、
 うとのり給ぬ神無月廿日あまりの事

【第13紙】

なればふりみふらすみさためなき有明の
 月も哀にてあらしはけしくふきくるも
 我をとふかとうたかはれ涙をもよほし給ひ
 けるさて尼君のもとへおはしつきて
 ありしつらさをこま／＼とかたり給へは
 まことにはる／＼の道をおほし立ぬるも
 御ことはりそやむかしも今もまことならぬ
 おやこの中かなしさよ御ま、母なりとも
 いつくをにくしとおほすらんか、るうき世に
 て侍れは何事のうさをも思ひすて、すく
 しつるとてすみそめの袖をしほるはかり
 なり

【第14紙】 第三段 絵

〈第四段〉

【第15紙】

さても少將はその夜たいにおはして侍
 従をたつね給へともをとせざりけりもし
 姫君の御あとなどにもねたるにやとて
 きちやうのうちまで見せたまひけれとも姫
 君もおはしまされはむねうちさはき
 あやしとおほしてあなたこなたを見給ふに
 夜のふすまも見えずとりした、めたるけ
 色なればあきれて声もおうしますなき給ふ
 を中の君きこしめしたまふはこのほと世を

うき物とおほしたるけ色にてなげきかち
 には見え給へともかくまでは思ひよらざりし
 とてなきたまふ三の君ともろ共にこ、かし
 こをたつねありき給へはもやのみすにむす
 ひつけたるうすやうありなにとなくとりて
 見給へは姫君の御手にて

なき名のみたつ田の山のうすもみち

ちりなん後をたれかしのはん

とか、れたるを中納言殿に見せたまへは
 たとひいかなる事有とも我にはしらす

へかりしにおやの子をおもふほとは思はざる
 事のうらめしさよとて此うたをかほに

あて、なきふし給へりま、は、是をき、て
 おとこなのもとにおはすらんよもうせ

【第16紙】

給はしさのみななけかせ給ひそと有しかは
 中納言まことに此きみはかりを是我身にも
 かへましくおほゆるに何事もかなはぬうき世
 なれは思ふにかひなくあちきなさよとて
 さめ／＼となき給へは北のかた聞えけるやうは
 し、うにくるはかされてよものふるまひし
 給ふはしらてとつふやきければあなむつか
 しやこは何事そとてた、なきたまふ
 はかり也

(絵欠か)

【第17紙】

扱すみよしのありさますみの江とていと
 おかしき所なるか江につくりかけたるあんしつ
 なれはすこの下になうをなどのあそふもみ
 ならばぬ心ちしていと哀也みなみには一村の
 里ほのかに見えてとま屋ともにみるめかけな
 しあれたるあしふきの屋に心ほそくもたち
 のほるけふりのけしきもかすみに見えはさて
 ひかしはつた朝かほなどはひか、りて岸
 には色々の花をうへにしは海はるく見
 えわたりて波たてる松のひまよりほかけ舟の
 あはちしまをゆきかよふさまいとおかし日の
 入を見たまへはなみの中へいと見えてわざ
 もくるならては人めまれにとしつかに哀
 なるすまるにてそ侍りけるちふつたう
 にはあさやかなるあみたの三そんうつくしく
 すへ奉りて日の人おりはあまきみにし
 にむかひてなむさいはうこくらくせかいけい
 しゆあみたによらいほんくわんあやまらせ
 給はてこしやうたすけたまへと申あたりし
 を姫君も侍従ももる共にいまはあまに
 なりておなし道にとのたまへはあまか申
 さんま、にておはしませと聞えければ
 まことにそむきかたき心ちしてた、明暮

【第18紙】

はほとけの御前にて御きやうを讀
 花かうなどをたてまつりなとそした
 まひける
 (絵欠か)

【第19紙】
 扱都には中納言神ほとけに此世にてい
 ま一たひあはせてたひ給へとあさ夕いのり
 給ひける中の君三の君もわする、隙なく
 姫君の事のみたまひてし、うの君さへ
 よろつ夏かしかりし物をいかなる所にか
 侍りて都をおもひ出給ふらんとこひ忍ひ
 給へはま、は、聞えけるは何事を朝夕まか
 くしくなけき給ふそ我いかにも成たらん
 にはよもそれほとには侍らしとはらたち
 ければおやなからも情なくこそおほしけれ
 すみよしには冬ふかく成ま、にいと、さひ
 しさまさりゆきおきつしほ風ふきしほり
 こきくる舟はあやしきこゑにてみくさかけ
 たるなとうたふもさすかにおかしかりけり
 都には中納言殿をはしめたてまつりて
 かたへの人々もいかになけきたまふらんおや
 に物をおもはせ奉るは罪おもし事なるに
 いきてあると斗なりともしらせ奉らんと
 おほしてあま君のつかへるわらは京のもの

にてよくしりたるに此文しかくの所へ
 もちてゆきいつくよりとも申さて奉りて
 いそきくたるへしとよくをしへてのほせ
 ければ中納言殿へまいりて中門のきはに

【第20紙】

たちよりてた、すみければおりふしはし
 たもの出けるに此文あけてたへとてわたし
 ければとりて入ぬいつくよりそとたし
 かにとへと有しかは出て見るにつかひなし
 あやしやいかなる文そとてひらき見給へ
 は姫君の御手にてそありける世中
 の忍ひかたさに行ゑしらす成にし事
 をおほしなげくかたもおはすらん浅まし
 ながらたひたちたるほとはた、おほしめし
 やらせたまへなくさむかたとはそなた
 のそらをなかめあかしくらしふきくる
 風もむつまじくてのみおしからぬ露
 のいのちをなからへて侍るさこそ殿のなけ
 かせたまふらん哀むかしにかへる世なりせ
 は御返事恋しく侍るとかきておくに
 あさかほの 花のうへなる 露よりも
 はかなき物は かけろふの 有かなきかの
 こ、ちして 世を秋風の うちなひき
 むれあるたつの わかれつ、 た、われひとり
 ありそ海の かひなきうらに しほたる、

あまの衣手 わかことく ほしそわつらふ
 目をへつ、 おもひます田の ねぬなはの
 くる人もなき あしひきの 山した水の

【第21紙】

あさましろ なかれ出し ふるさとへ
 かへらん事も おもほえず いかにちきりし
 いにしへの むくひなればや たちちをの
 中をはなれて つるの子の 雲井はるかに
 たちわかれ 行ゑもしらぬ しら波の
 よるのころをも かへしつ、 ぬる夜の夢の
 ゆめならて 恋しき人を みちのくの
 あふくま川を わたるへき 我身ならねは
 さ、かにの くもてに物を おもふかな

鳥のこゑたに をともせず とをちの山の
 たにふかみ くちははつれと むもれ木と
 成はてぬへき わか身なりけり

とあるを見たまふにあはれなる事心あ
 らん人はをしはかるへし中納言殿
 此つかひをうしなひつるかなしきよとて

この文をかほにあてたまひていかなる所に
 たひたいてあかしくらすらんと心うさ
 まさりてなきたまふ事かきりなし

【第22紙】 第三段 絵

【第23紙】

三のきみ袖もしほるはかりにて少将
 にしかくとかたり給へはふししつみ
 なきたまふ事人にもすぐれたまひ
 けり正月のつかさめしに左大臣は

くわんはくになりたまふせうしやうは
 中将になりたまふされとも中将はつかさ
 くらるの事もさのみよこひ給はずひとへ
 いた、神ほとけの御前にてこの人の
 あり所をしらせたまへとそいのりたまひ
 けるされともそのしるしもなくして
 春夏もすきにけり

(絵欠か)

下巻(第一段)

【第1紙】

長月の十日はかりに三位中将初瀬に

こもりていのり給ふに二七日と申夜も
 すからをこなひたまひてあかつきかたに
 すこしまとろみ給へるゆめにやんことな
 き女房かたはらにうちそはみてゐたるを
 見れば恋かなしむ人もせんかたなくうれ
 しくていつくにおはしてかくいみしき
 めを見せ給ふそいか斗おもふとおほすらん
 といひければ打なきたまひてかくまてとは
 思はざりしいと哀にこそとてかへらんとし

給ふ袖をひかへておはせし所をしらせ
 まへとありければおもひわつらひたるけし
 きにて

わたつ海そこともしらす侘ぬれば

すみよしとこそあまはいふなれ

と見たまひて打おとろきて夢としり

たらはさめまし物とかなしくてさても

佛の御ちかひそたのもしくおもひ夜の

うちに出て住よしといはん所をたつねんと

【第2紙】

てともの人をは都へかへしすいしんを

二人くしてすみよしのかたへそおはし

けるならばぬかち、のたひなれば道ゆき人

のめをとめてあやしひけるもことほりなり

はるくくと波たてる松のひまよりもいと

かしき家とも所々にありて海も見えわた

るところに行つきたれともいつくともしらす

いとかなしくて松のしたにやすみゐて

あかつきの夢をたのみてきつれとも

すみよしとたにいふ人もなし

とうちなかめ給ひて歎給へるところに十斗

なるわらはへの松のおち葉をかきてあたりし

をちかつけ給ひてをのれはいつくのもの

そ此あたりをは何といふ所そとたつね

給へはこ、は住よしわらはも当所のもの也

と申ければとひたつ斗うれしくてきて
此あたりに都の人のすみける所や有とのたまへは
住の江と申所に京の尼うへとておはずと申けり

(絵 欠か)

【第3紙】

さてこま／＼ととひ給ひたつねておはし
たれは江につくりかけたる所のいと物さひし
きに人も見えす物哀なるに日もくれけれ
は松のしたにて人ならばとはまし物を
とうちなけき給ひけるさらぬたにたひの空
はかなしきに夕波ちとりなきわたり松風す
こく吹たるにことのねほのかに聞えけりいかな
る人のひきしそとおほしてつりとのか
たにた、すみ給へはにしおもてにわかき声
にて此ころは松風なみのをとこそ哀なれ
都にてはかゝる所も見さりしを心あらん人に
見せまほしきなど打かたらひしこゑ侍従と
き、あなあさましとむね打さはきつ、
なをき、給ふほとに
たつぬへき人もなきさのすみの江に
たれまつ風のたえすふくらむ
としのひやかにいふを中将姫君と聞なして
あらゆ、し是そ仏の御りしやうそとうれ
しさかきりなくてすのこにたちよりうち

た、けはし、ういかなる人にかとおとろき
てすいかきよりのそきて見ければ夜めに
もまきれなしあな浅まし中将殿おはし
たりいか、侍らんと申ければ姫君いと哀には

【第4紙】

おほしけれとも都へのきこえいか、しき
事なれば我はこゝになしとこたへよとの
たまへはし、う出あひてあなゆ、しあや
しき所までおはしましけるそやその、
ちひめ君をうしなひまいらせてよりせめ
て心をもなくさめはやと思ひつ、これ
までまとひいて、侍るになんさても思
はず見たてまつればそのむかしの心ち
してといひもやらす涙くみけり中将の
たまふやうさてもかはる御心のうらめしくも
侍るものかなた、今御こゑまでき、つる
ものをおほろ氣にてこれまでたつね
きたるへきものかはと聞えしかは侍従
ことわりとおもひて去なからまつ御あしを
やすませ給へ都の事もゆかしく侍るに
とて尼君にしか／＼と申ければさても
有かたき事かなたれも／＼物の哀れをし
り給へかしまつうちへいれたてまつり給へ
とありしかはし、うさし出てなれ／＼
しく侍れともむかしの御ゆかり又は

たひの空はさこそかなしく侍らめまつ
立いらせ給へと申ければ内へ入給ひて
見たまへはかみひやうふのやまとゑかきたる

【第5紙】

によるひにはきちやうとおほしくてかた
ひらかけてあらまほしくしつらひて
そ見えにける尼君いそぎ出て聞えけるは
姫君もこれにおはしますし、うも哀には
つ、ましさになん此あまはよしあしあはれ
なる事も思ひならひ侍るこれまでたつね
おはします事はよのつねならぬ御事なれば
いかてかをろかにはおほさんとてこのよし
姫君に聞えければ我もをろかには思ひ侍
らねとも此事都へ聞えるはこゝろあはせ
たるやうにおほさん事は、かり参らせて
なん此よしきやうに聞えてかへし給へ
とのたまへは御ことわりはさる事なれとも物の
哀をしらざるは岩木にことならず今は
た、あまか申さんま、におはしませと
いひこしらへてし、うた、姫君のおはし
ます所へ入まいらせ給へとて夜ふくるま、
によひいれ奉るさか野にて見しよりも
さかりたち給ひてうつくしきもなつかし
さも申は中／＼をろか也

(絵 欠か)

【第6紙】

かくて二三日にも成ぬれば都へ聞えける
ほとにをのく参りあつまりてかすかに
さひしかりし所もきはしくさかもり
のをとなどしければあたりのものとは
いかなる事そとておとろくほとにいさみけり
さて京にはくわんはく殿をはしめたて
まつり北のまん所も少将殿人をもつれ給は
てひとりすみよしに参り給ふよしをき、
おとろき給ひて御ともに参りてかへりたり
し人々をはいみしくとかめさせ給ひける
か、りしほとにさゑもんのかみ宰相の中将
くらんと少将兵衛のすけなとをはしめ
として四位五位にいたるまで其かすお
ほくすみよしへたつね参り給ひて少将殿
を見たまへは浅ましくおとろへさせたまへは
いかやうなる御事にかと聞えければくわん
おんのむさうによりて是へ参りければ
此あたりにすみけるものを見あひて住
すてかたくてとのたまへは神ほとけの御前
に参りておこなひをこそあらまほしけれ
ゆ、しき御つとめかなとてたはふれたまへは少
将うちわらひたまひてうれしくものをのく
これまでたつねくたり給ふものかな難波

【第7紙】

あたりもかゝるつゐてならてはいつか見る
へきとて夜ふくるまゝに月さやけくすみ
わたり松風波の音たくひなく聞えければ
すみの江にて御あそひ三位の中将殿と
くらんと少将はふえさゑもんのかみはしやう
さいしやうの中将は琵琶兵衛のすけは
とひやうしをそとりあはせ給ひける姫君
をはしめまいらせてし、う尼君これを
き、給ひてすこしははる、心ちしてなく
さみ給ふ明ぬればあま人をめしよせてつり
をたれさまくあそひをそし給ひける

【第8・9紙】第二段 絵

【第10紙】

さてつきの日京へのほり給ふ姫君は二とせ
まですみなれ給ふ事なれば尼君の名残
いとかなしくて道すから涙斗にてやう
くあとも遠さかり一むらの松のこすゑは
かり見えければ
すみよしの松のこすゑのいかなれば
とをさかるにも袖のぬるらん
とゑいし給ふさて川尻をすくれはみなく舟
にのりて心からうきたる舟にのりてなとうたひ
てよとまでそをくり奉りける

【第11紙】第二段 絵

【第12紙】

さて京へのほり給ひて中將殿参りた
まへはあやしきありきし給ふものかなとそ
おほせける北のかたたいをしのひてすませ
聞え給ふさて北のかたのたまひしはこのほと
の物思ひいか斗とかおほすらんさりながら
ゆへなくかへり侍れはうれしきはかきりなし
とそおほせけるかくてその、ち二條の
京こくなる所にわたり出すみ給ふほとにつき
のとしの八月にうつくしきわか君いてき
給ひけりかしつき給ふ事かきりなし年月
かさなりて姫君の御父中納言は大納言に
なりたまふ三位の中将も中納言に成て
ほとなく大将になり給ふいと、花やかにめてた
き御ありあままなりその、ち又姫君いてき給
ぬとし月をふるまゝにわか君は六姫君は
五にならせ給へは八月にはかまをさせ
たてまつらんそのついでに大納言殿にしらせ
奉らんとしたまへはひめ君いと、うれしと
おほしける大將うちへ参り給へは折ふし
大納言殿にあひ給ひて物かたりのつゐて
に八月十六日におさあひものともにはかま
をきせんと思ひ侍ることさら申入候はんと
のたまへはうけたまはり候ぬさりなからさやう

【第13紙】

の御いはひの所へまか／＼しき身にしてい
か、とのたまへはくるしからすかならず
いらせ給へと仰ければ此うへはともかくも
おほせにこそとて出たまひけりその日にも
成ぬればむつまじき上達部殿上人を

の／＼まいりあつまり給へり時になりて大
將殿大納言をもやのみすの所にしとね

をしきてしやうしすへ給へは姫君も侍従
もちかくよりてきちやうのほころひよりのそ
きたまひて心のうちにたとへんかたもなし
さかりにおはせし時の御すかたを引かへて
あらぬさまにおとろへさせ給へりさて若君
姫君のこしをゆひ給ひて大納言袖を

かほにあて、打ふし給へりや、ありてのたま
ふやう御よろこひの所へはまか／＼しくとた
めらひ侍りつるに此姫君の御ありさまを
見侍るに我うしなひしむすめのおさな
かりし時にすこしもたかふ所なく見え

給へはそのむかしの事おもひひて、しのひ
かねたるにゆるさせたまへとてなみたもせき
あへ給はずなき給へり姫君もし、うも是を
見給ひて一しほかなしくおほして涙もせ
きあへ給はずさて大納言殿にはうちき

【第14紙】

ちいさきをたてまつりたまへはあやしくは

おもひなからとりてかへり給ふありさまい
かにおもひやるへし

【第15紙】第二段 絵

【第16紙】

大納言かへり給ひて北のかたにのたまふや
うは大將殿の我をむつまじきものに
おほしてもてなし給ふまことにありかた

なんうつくしきわか君姫君たちを哀わか
まこと思はましかはいかにうれしからんこと
さら姫君はたいの姫かおさなかりし時に
よくに給ひたるに哀つねに見たてまつらはや
とのたまへは北のかた聞えけるやうは三の
君の所へおはせし人なれはそのゆかりにて
むつまじくし給ふらんさてそのきんたちは
すみよしのけすはらの子なりとてくわん

はく殿もさのみもちい給はぬとこそ申けれ
とそ申されけるさてうちきのふるしく
ちいさきをたひぬればあやしとおほして
とりよせ見給へはたいの君に物きせはしめし
ときのうちきなればた、しとしよりて

ひかめにやとうちかへし／＼見たまへとも
たかはすそれなればむねうちさはきて
あやしければさうしき二人具していそぎ
大將殿へおはしましてしんでんのすのこ

におはしければ大將やかてさとりて出あひ
給へはまつうちなき給ひてうちつけなる申
事にて侍れともつねにむつまじく侍れ

【第17紙】

はゆるさせ給へきのふたまはりしうちきを
よく／＼見れば我うしなひしむすめに物
きせはしめし時のうちき也た、し老

のひかめにやわか心にかゝるま、人めもしらて
まいり侍る也とのたまへは姫君もし、うも
もやのみすのうちよりたち出たまひて物
をもいはてなき給へは大納言これを
見たまひてこゝろもまとひて物をもの

たまはずしはらくありてし、うにむかひ
てのたまふは姫君こそあやしきおやとて
をとつれ給はすともし、うはなとやほのめかし
給はざるや我露の命なからへてあれはこそ
見えもし見もし侍れもしきえなはおやに
おもひをふかくかけたまひ我もわする、世有へ

からす年月のなけきをはいか斗とかおほすらん
とのたまへは大將殿もし、うもはしめよりこの
かたの事ともをのこらすかたり給へはむかしも
今もためしなき事になんやう／＼日も暮
ければ大納言かへり給ひてま、は、にの給ひ
けるやうはたいの君こそたつねいたして侍れ
まことにあやしきそうに具してひかし山に

侍りけるとのたまへはま、は、まこと、思ひて
あなゆ、しの御事やいかやうにて侍るそや

【第18紙】

くはしくかたり給へと有しかはいかなる人のう
とましき事をたくみてたはかりけるにや
とおもひつ、住よしまてまどひ行て二年
まてしのひるたりしを大將殿物まうての
たよりにたつねあひてとし月を、くりけ
れともよものおそれに忍ひ給ひけるとなん
かのわか君ひめ君も我まこ也あやしき
そうに具してとありつれと大將殿たくひ
なきものにおほす也よく／＼きけとにく／＼
とのたまへは北のかた心もきゆる斗にてかほ
打あかめていひやらんかたなくてそゐたり
ける中の君此よしき、給ひてたいらかに
おはしましけるうれしさよとく／＼見まいら
せはやとてよろこひ給ひておやなからもう
とましくこそ思はれければ大納言殿は身に
そふ物の具斗とり具しておそろしき所
にすみて何かせんとてこ宮のさと三條
ほり川なる所へわたり給ひておはしける
大將殿このよしき、給ひていかてかさやう
に侍るへきそた、かへらせ給へとこのたまへは年
比のつらきおもひをなしつるものものゆへ
なれはうらめしき事此世ならずよの事の

おほせにて侍らは命をなりとも奉りなん
【第19紙】

此事とてはゆるさせ給へと聞えければちから
なくその、ちは何とものたまはずして皆
皆三てうへそまいるあつまりけるひとりすみ
給はん事もよろしからずとて大將殿のおは
こにたいの御かたと聞えしをあはせ奉り給ひ
けるむかしよりもとみさかへおはしけるま、
母のかたにありつる女房たちこの君の御なさけ
わするへきかとてもみな／＼大將殿のうへの御もと
へそ参りける中にもかの御心よせのしきふ
は又となくおやなどのやうにもてなし給ふ閑
白殿もゐ中の人のむすめとき、しにあせ
ちの大納言の姫君みやはらにておはしける
そやねかふても有へきめてたき事そとて
御ふた所なからよろこひ給ふ事かきりなし
大將殿は内大臣になり給ひて大きやうの
そんしやうにはあせちの大納言おはしけるよ
ろつめてたく聞えける兵衛のすけもま、母の
事を聞給ひて中君へたえ／＼にそ成に
ける中の君三の君もおやなからもうとまし
き事を忍ひしかは人のとをさかるもこ
とはりなりとてふたりなからねをのみそ
なき給ふ内大臣のうへ此よしを聞給ひて
むつまじかりし人々なればむかへとりて

【第20紙】

すきにしかたの事ともをかたらはやとの
たまへは内のおと、けにとゆるしたまへは
ふたりの人をむかへ給ひてわか御子のや
うにかしつき給ふかくて月日を過るほと
にわか君けんふくして三位の中將に
成たまふうちのおと、はくわんはくに成
給ふ姫君は北のまん所とそ申ける姫君
十七のとし女御にまいらせたまひて花や
かに入れてたき御あり様也し、うはおとなに
なりて侍従のないしとて世の人もちい
けり

【第21紙】 第三段 絵

【第22紙】

さてもま、は、は人々にうとまれてやふ
れたるいゑのさすかひろ／＼としたるに
むくつけ女と二人あかしくらしける
人に物をおもはせたるむくひなればた、なく
より外の事はなしとし月をふるま、に
おとろへはて、つゐにはかなく成にけり後の
さたする人もなかりければし、うのないし此
よしをき、てしか／＼ときたのかたに
申ければあはれにこそ侍れとて忍ひつ、
とふらひとて中の君三の君のいとなみ給
よしにてさま／＼とふらはせたまひけり

それを見これをきく人々有かたき事
とかんせぬはなかりけりむかしも今はせの
くわんおんはりしやうあらたにおはしけり
なさけ有人は行ゑはるかにさかへ心あし
き人をはめの前にかれうする物也心あらん
人々はしのへかしとてかきと、め侍る也めて
たき事とも也

個人蔵「住吉物語絵巻」



現装 軸端 (上巻)



上巻 表紙・見返

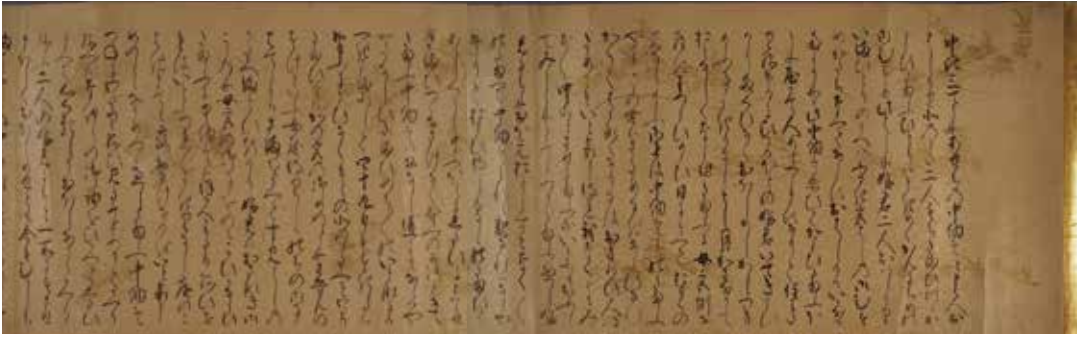




中巻 見返・表紙部分拡大図・表紙



下巻 表紙・見返・見返部分拡大図



↑紙継

第2紙

↑紙継

第1紙



第5紙

↑紙継

第4紙

↑紙継

第3紙

↑紙継



第7紙

↑紙継

第6紙

↑紙継 (第5紙)



↑紙継

第9紙

↑紙継

第8紙

↑紙継 (第7紙)



第12紙

紙継 ↑ 第11紙 ↑ 紙継

第10紙



第15紙

↑ 紙継

第14紙

↑ 紙継

第13紙

紙継 ↑



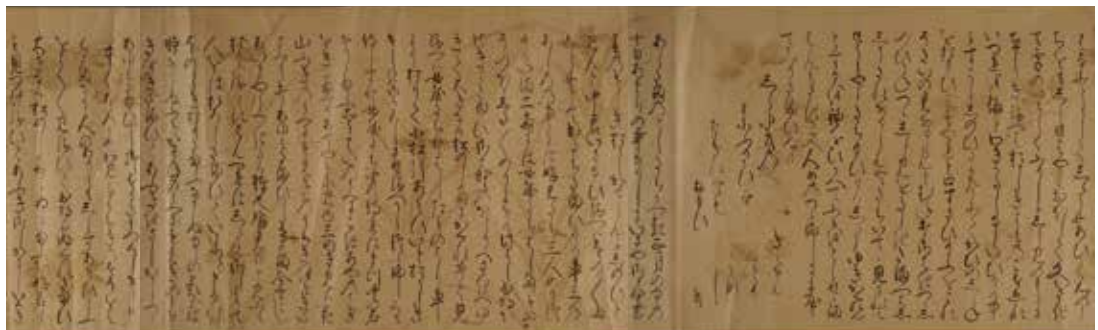
第17紙

↑ 紙継

第16紙

↑ 紙継

(第15紙)



第19紙

↑ 紙継

第18紙

↑ 紙継

(第17紙)



↑紙継

第21紙

紙継↑第20紙 ↑紙継

(第19紙)



上巻軸付

↑紙継

第23紙

↑紙継

第22紙



第3紙

↑紙継

第2紙

↑紙継

第1紙

中巻

(見返)



第5紙 ↑紙継

第4紙

↑紙継

(第3紙)

← 前頁と重複 →



第7紙

↑紙継

第6紙

紙継↑(第5紙↑紙継 第4紙)



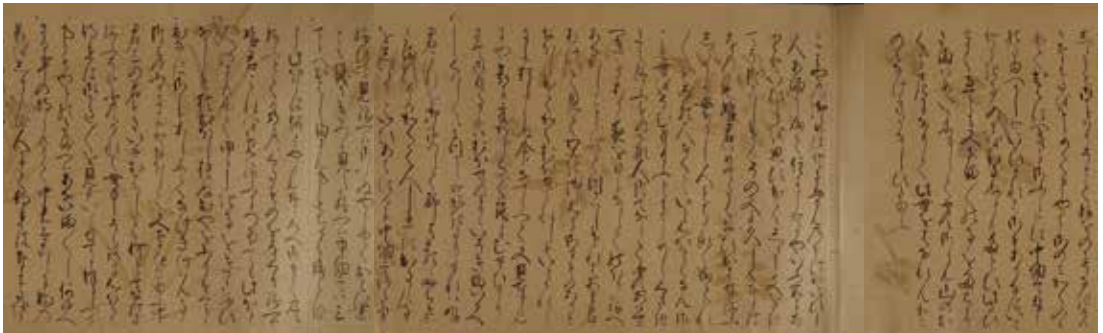
第9紙

↑紙継

第8紙

紙継↑

(第7紙)



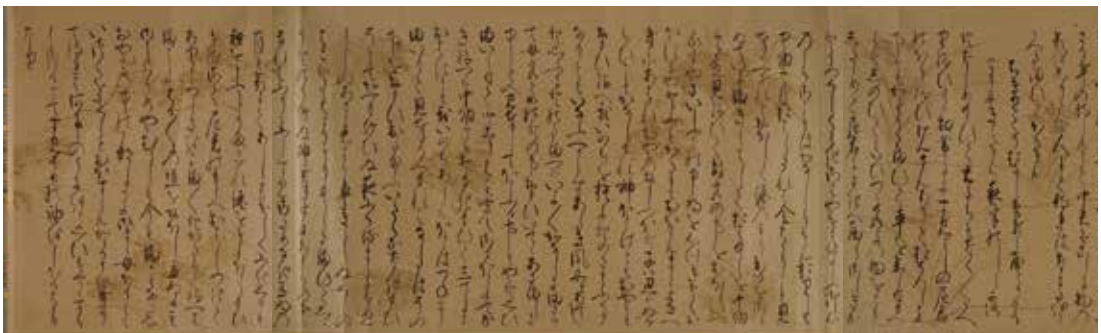
第11紙

↑紙継

第10紙

紙継↑

(第9紙)



第13紙

↑紙継

第12紙

↑紙継

(第11紙)

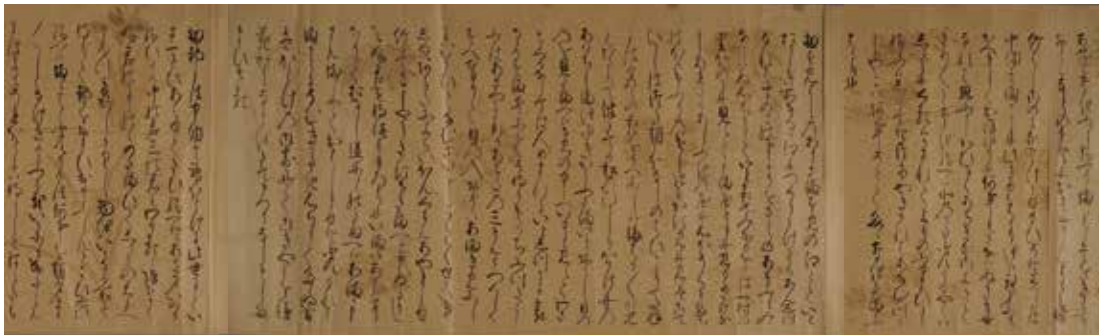


第15紙

↑紙継

第14紙

紙継↑



第19紙

紙継↑第18紙↑紙継

第17紙

紙継↑

第16紙

紙継↑



第21紙

↑紙継

第20紙

↑紙継

(第19紙)



↑紙継

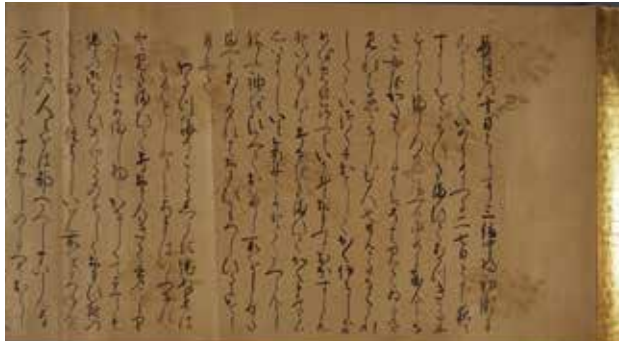
第23紙

↑紙継

第22紙

↑紙継

(第21紙)



↑紙継

第1紙

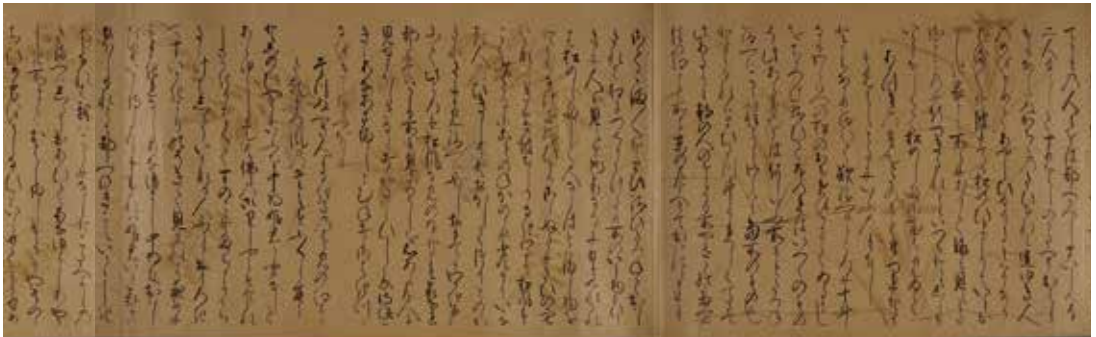
(見返)



中巻軸付

↑紙継

下巻



第4紙

↑紙継

第3紙

↑紙継

第2紙



第6紙

↑紙継

第5紙

↑紙継

(第4紙)



第8紙



↑紙継

第7紙

↑紙継

(第6紙)



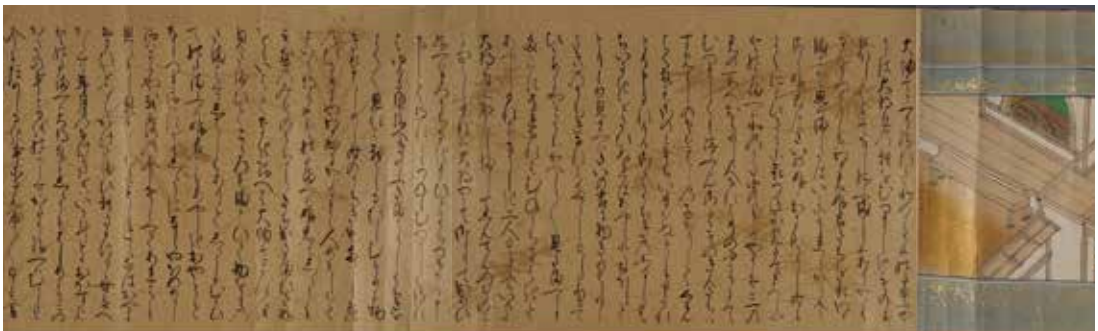
第11紙 ↑紙継 第10紙 ↑紙継 第9紙 ↑紙継 (第8紙)



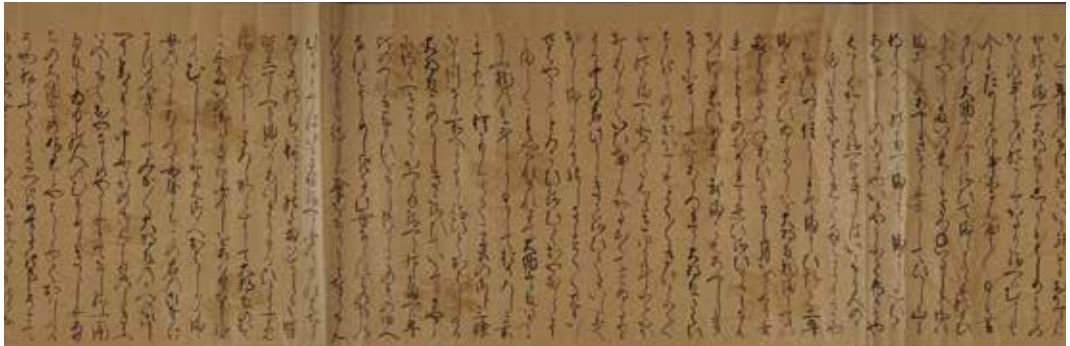
↑紙継 第12紙 ↑紙継 (第11紙)



第15紙 紙継 ↑ 第14紙 ↑ 紙継 第13紙



第17紙 ↑紙継 第16紙 ↑紙継 (第15紙)



第19紙

↑紙継

第18紙

↑紙継

(第17紙)



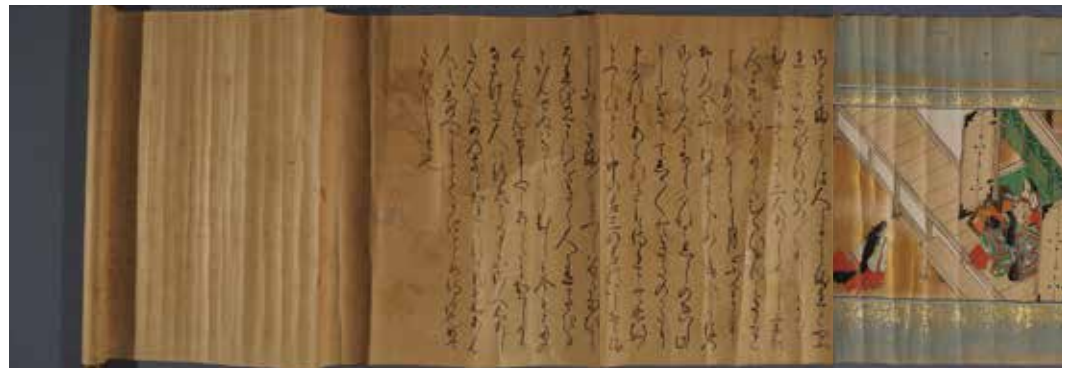
第21紙

紙継↑

第20紙

↑紙継

(第19紙)



下巻軸付

↑紙継

第22紙

↑紙継

(第21紙)

Abstract

Sumiyoshi Monogatari Scrolls in a Private Collection
: Transcription into Modern Japanese and facsimile

Shizuko HARAGUCHI

There are many different versions of the Sumiyoshi Monogatari, including manuscripts, picture scrolls, Nara picture books, and woodblocks. This paper contains transcription into modern Japanese and facsimiles of the three picture scrolls in a private collection. For the contents and art historical evaluation, please refer to the article by Aki Tanaka in this volume. reprints, proofs, and shadow prints of the first, middle, and bottom three volumes of the picture scrolls.

Key word : Sumiyoshi Monogatari, Painting Scroll, Edo Period, Abbreviated version